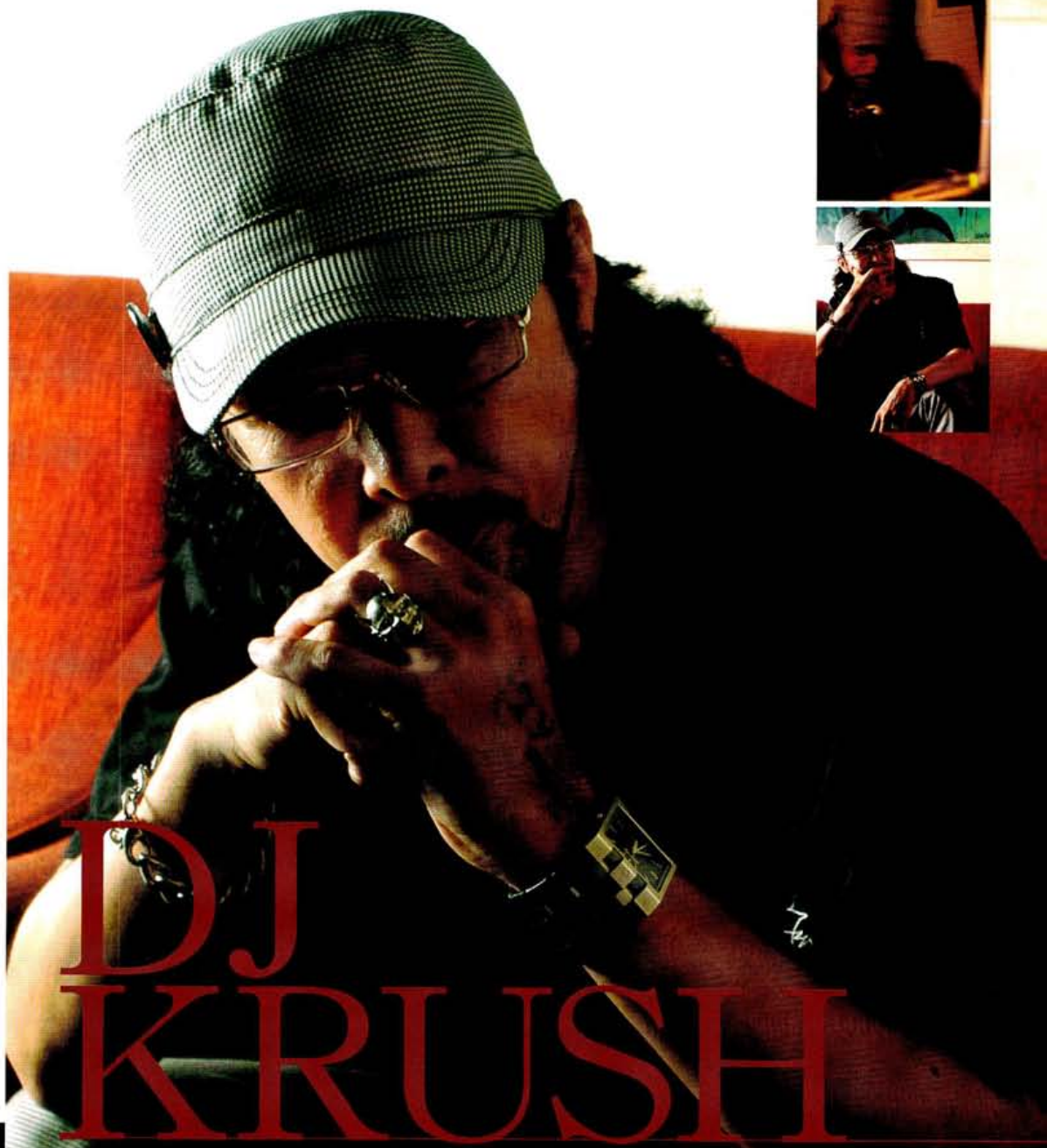


The Real Face

取材・文/竹中 聡(本誌) 撮影/エディオオムラ
撮影協力/Music Store JAPONICA・park cafe

The GOD of "DJ"は、 ターンテーブルを武器に。



DJ KRUSH

DJ クラッシュ

'62年東京生まれ。映画「ワイルド・スタイル」に衝撃を受け、'87年にヒップホップ・チーム「KRUSH POSSE」を結成。'92年に解散後はソロとなり、日本で初めてターンテーブルを楽器として操るDJとして注目を浴びる。'94年に1stアルバム「KRUSH」をリリースし、日本、ヨーロッパ、アメリカを中心に世界各地で多数の作品を発表。去る3月に、これまでの12年間の足跡を記録したドキュメンタリーDVD BOX『吹毛常磨』をリリース。

<http://www.mnjp.or.jp/sus/krush/>

当代随一のDJエキシビジョン 感想は「丸い感じ」の邂逅in京都

「ターンテーブルは楽器か?」。それがまだ「疑問」であった頃から、一閃する音は耳に響き、胸をえぐり、そして斬る、楽器を越えた「武器」として操っていた。むしろ先の言葉を「疑問」にしたのが、彼、DJ

元来が「洋」の文化に「和」のモチーフを使うには、相応のリスクがある。踏み外したアプローチをしてみようと、「抹茶臭さ」というマイナスイメージであったり、違和感が香ってしまうことがある。日本の中で「和」が際立つ京都にあっても、それは同じだ。そのリスクは感じないのだろうか。不躰な質問ではあるが「おっしゃることは

た頃、世界中から集まった級友に自国の文化を問われ、答えられずに悔しい思いをしたという例を持ち出すと、我が意を得たりという表情になった。「うんうんうん。そうですね。アメリカやヨーロッパに呼ばれて、空港からの車のなかで『この時間はまだ明るくて、あの建物はこうなってる』って説明されるんですよ。で『日本は

イックなDJとして、人々から畏敬をもって知られ、頂上に君臨する者、人を越えたことがある者、DJの「王」ではない、「神」である。

彼の笑顔が途切れぬように
いつまでも、音が続くように

『鼓道 Ko-no-Michi』

Sony Music Japan International : DVD [SIBL-6]
¥3,800 (税別)

「RUSH」だ。

そんな彼が京都で、わずか数十名のオーディエンスの前でエキシビジョンを行った。過去のポートレート、DJセットなどの展示にトークセッション、そして少しのプレイをプレゼントした。

エキシビジョンに先だって話を聞く機会を得、目の前に現れた彼は意外と華奢で、意外と高い声を持っていた。だが、威風凛々を圧す感である。世の中には、歩いていだけで道を譲りたくなる人がいる。その根拠が「畏敬」とか「畏怖」と呼ばれるもので、居合わせた誰もが、彼が吸うべき空気をうっかり吸って、彼の呼吸を邪魔しないように気を付けている。そんな感じである。

これまで京都には何度も訪れているが、「実は修学旅行は病気になるってしまっただけで、この仕事を始めてから、10年くらい前だったかな、(KYOTO JAZZ MASSIVE) 沖野君に呼んでもらったのが初めて」であった。京都に対して持っている感想を訊くと、それは形であった。「丸い感じがします。高くもなく、低くもなく、でもそれは安定していて、その中を気持ちよく縫う感じ。結構な回数呼んでもらってるんですね。現場の中にいると、特に東京では音もそうだけど色んなものに囲まれちゃって、でも京都はそういう囲まれてる感じがしないらしい。

やりたいことと並ぶから ゆえに漢字、ゆえに日本語

去る3月末にリリースされた3枚組DVDのタイトルが『吹毛常磨(すいもうづねにます)』。さらに6月20日には、その中からそれぞれ『阿吽』『鼓道』をリリース。他にも過去にリリースされたタイトルには『寂』『深層』『漸』、漢字のタイトルが並ぶ。

「3枚目の『迷走(MEISO)』というアルバムから、タイトルに漢字を使い始めたんです。かなり海外に行っていて、表に出れば出るほど自分たちの国が持つ漢字の意味合いが深くなって、自信を持って使えるようになったのかな。」

何となく解ります(笑)と前置きし、「やっぱり僕の仕事っていうのは音をつくったり音をかけて、自分の中にあるものを観てもらう、嗅いでもらおうという感じなんです。そこにおいては『日本人』というの意識してないですね。特に僕はHIPHOPでものにやられて(この世界に)入ってきたんで、自分にしかできないものを世界に対して『吐き出して』行かないと、認めてもらえないんですよ。黄色い肌をしている人間が、黒人の、しかもアメリカの「HIPHOPだぜ!」って言ったってね。そういう流れもあって、日本語を使うべきなのかな、と。その方が音と、やりたいことと並ぶのかな、と。それまでは『音が伝わりやすいや』と思ってた」と説明してくれた。

「日本は今、人口どのくらいなの?」 答えられないと、何かこそばゆい

日本を内から見ると、外から見ると。ここで決定的に彼我の差を思う。後者の場合、生半可な経験では発言は許されない。DVDでは、世界33カ国・176もの都市で、延べ140万人以上のオーディエンスに相對したことが明らかにされた。関東だとか関西だとか、そんな次元は遙かに越えている。

「始めた頃は日本を背負ってるつもりはなかったし、一人としてやってたんだけど、海外に行けば行くほど、例えばこうやってその国でインタビューを受けると、僕の背中『日本』が付いているんです。僕を通して『日本』であることなのだ。『僕を通して日本のことを訊かれる(聴かれる)』と、自分の国のことですから、そこはいい加減なことは言えない。という責任感が知らないうちにくっついてちゃって(笑)。自分の後ろというか、背中を見る余裕が最近ではきたから、それを苦しいとは思わなくなりました。」

京都を代表する美容師、「Bond Envy MAKEUP」の西田齊さんが、イギリスのヴイタルササーンが営む美容学校で学んでいる。

今、人口どのくらいなの?」って訊かれたら、言えないと恥ずかしいしね。答えられないと、何かこそばゆい。」

音は吐き出すもの、道は極めるもの あまりに人間的な、DJの「神」

職業を訊かれれば、「DJ」と答える。「職業というよりも、『音』という見えないものを僕は吐き出しています。僕にとつては『画』だし、『1時間の短編映画』だったりもするし。だから時には画家になったり、映画監督になったりという感覚。『踊らそう』なんて全く考えてなくて、いかに頭の中に詰まった僕の音の感じを伝えようかなっていうところに主軸を置いている。」

いま、具体的に見えているものは、特にない。「今まで音楽を20年近くやってきて、やればやるほど、上に行こうとするとですね。進まなきやいけない、と。すると課題がどんどん出てきちゃって、だからそういう意味では音楽を通して自分の道をつくっていくかきやならないのかな。何かあるのかはわからないけど、でも、それをつかめないうちに墓場に足を入れるのかな(笑)。そのくらい音楽ってデカイと思うし、自分と向き合えば向き合うほど、自分がどこまで表現できて、出せてっていう、そこを知りたくなるじゃないですか。それは欲の塊だから。」

自分に対して許せない部分が次から次に出てくる。そして、境地は死出の、その先か。求めて求めて、求めすぎるから、自分の寿命では追いつかない。求道に欲を肯定し、それを恥じない。それは開き直ったものではなく、あつて然るべきもの。欲があるから、前に進める。そして道を極めようと思える。音を「鳴らす」でもなく「奏でる」でもなく、「吐き出す」という言葉を使うのは、そこに抗いようのない熱量があるからではないか。咆哮や嗚咽のような、腹の底から放たれる、産みの苦しみのようなもの。

そんな彼を見ていて、「神」という言葉思い出した。宗教的な意味ではなく、スト

専門的な質問がなかったことを詫び、どんな紹介記事になるのか、不安に思っているのでは?と問うと、彼は「あっはっはっはっは!」と大笑し、「実はちょっと思ってます(笑)」と言った。原稿をチェックしても、基本的には何も言わない。そういうタイプの人だ。「言い放っちゃったものなので、手は加えたくないから。だがこちらにも責任がある。これだけは伝えてくれという言葉を下さい、と願ったところ「答えより質問の方が面白いじゃない(笑)」といつて、また笑う。それでも食い下がると、「そこまて言われるとね(笑)。そうだな、この先どれくらいDJでできるか解らないけど、今年もう45歳になりますからね。この歳でDJも珍しいと思えますけど、気持ちとして横に看護婦を立てて、点滴も置いて、点滴を打ちながらDJをやる覚悟をしているので。たまに動きが鈍くなってきたら点滴を速くしてもらって(笑)。その方が今よりナチュラルで良かったりしてね(笑)」。選んだ道は、そのくらい全うできる、一生懸命になれる道なのだ。

自分の道は最後まで見えないかもしれない。だがDJという存在の可能性と定義を、後進に示したことは間違いない。偉大な男が次に京都に来るのはいつかは解らないが、降臨を妨げない街でいなければ、と思う。京都については、おぼろげに心地よさを感じてはいるものの、まだ良さを語るほどではない。「人の畑はよく見えたりしちゃうからなあ(笑)。黒いところも白いところも良いと思っちゃう。でもいざ隣の畑に入ってみると『同じじゃねえか』と。まずは酒飲んで、まずはベタバタな観光客と同じで、ゆっくり色んなものを見て回りたいですね。」

それが叶う時にも、求道者の崇高なブレインに、非礼がない場所であれば、と思う。次もまた、神が笑ってくれるように。



Information

吹毛常磨

阿吽

鼓道

DVD BOX SET
『吹毛常磨』

『阿吽』

Sony Music Japan International : DVD [SIBL-5]
¥3,300 (税別)

Sony Music Japan International : DVD [SIBL2-4]